



よみがえる
日本のこころ
御遷宮

第六十一回 神宮式年遷宮
国民総奉賛・総参宮を

会長挨拶

会長 北川 憲史

天皇陛下には本年御齡八十八の御米寿の御慶賀を迎えられました。心から奉祝の誠を捧げる次第です。さて、一昨年画らずも会長に推挙され、誠に身に余る光栄でありますとともに、浅学非才でとも会長という器でないことは重々承知致しておりますが、早一年会員のご協力、諸先輩各位のご支援により都神青の名を汚すことなく、一年間諸事業に取り組んで、皆が持てる力を十二分に発揮されたことは、会員一人一人の自覚と精神の賜物と深く感謝申し上げます。本年は第六十一回神宮式年遷宮の奉賛会が設立され、募財活動が始められようとしていますが、本宗と仰ぐ神宮の式年遷宮の本質的な意義を広く啓蒙する重要な年であります。その為に青年神職一人一人がより切磋琢磨して斯道の尖兵として使命感をもって行動しなければならぬと強く思います。戦後間もない昭和二十四年以来今日まで、われらの先輩諸賢は斯道の護持興隆と民族の伝統精神恢弘運動に挺身され、戦後の神社界の歴史に多大の足跡を残された神青会も来年は創立四十周年を迎えんとしております。その準備も進めていかねばと思っております。本会の目的である研さんと親睦を図るには、各部の連絡を密にして人の和をもって青年神職でなければ出来ないこと、やらねばならないことを進めていくべく皆様方の参加、協力をお願い申し上げます。次第です。

昭和六十三年 定時総会開催

本会の定時総会が、四月十九日、東京都神社庁に於て開催され、来賓、諸先輩をはじめ会員ら五十名が出席した。(写真)

議事に先立ち午後三時より井上順孝先生(国学院大学助教授)による「宗教ブームを考ふる」と題した講演が行なわれ、その中で先生は昨今の宗教事情と我々青年神職の進むべき道について説かれた。

このあと総会に移り、山口総務部長の司会により、鈴木副会長が開会を宣し、神殿に拝礼、斎藤明比古会員の先導による国歌の斉唱、小泉勝俊会員の先導による敬神生活の綱領唱和、続いて北川会長が「昭和六十二年の諸事業が諸先輩や会員各位の積極的参加により滞りなく終了したことに感謝する。また、来たるべき本会の創立四十周年記念や神宮式年遷宮に向けて、会員一丸となって事業を展開して行こう」と力強く挨拶された。

引き続き議事は中田議長のもとに進行し、前年度事業報告が森山庶務より、同決算報告が篠会計よ



り報告されたのち、鈴木監事より監査報告があり、一同異議なく拍手をもって承認された。続いて本年度事業計画案・予算案の審議が行なわれ満場一致にて承認、このあと来賓の紹介があり、北川先輩、春田先輩が来賓を代表されて祝辞を述べられ、新入会員の紹介の後、内海寿之会員の先導により「美わしき山河」を合唱し、長谷川副会長の閉会の辞で盛大なるうちに総会を終了した。

新入会員紹介

- | | |
|---------------|----------------|
| 富田 好弘 O型 | 品川区 貴船神社兼務禰宜 |
| 千代田区 日枝神社権禰宜 | 昭和三十七年十一月二十三日生 |
| 千代田区 日枝神社権禰宜 | 鈴木 祐一 B型 |
| 昭和四十年二月十四日生 | 大田区 六郷神社禰宜 |
| 千葉 進 A型 | 昭和三十八年十一月二十八日生 |
| 千代田区 日枝神社権禰宜 | 宮崎 伸治 O型 |
| 昭和三十三年八月十八日生 | 世田谷区 奥澤神社権禰宜 |
| 清水 祥彦 O型 | 昭和三十九年五月二十七日生 |
| 千代田区 神田神社権禰宜 | 田中 寛之 O型 |
| 昭和三十五年六月二十八日生 | 江東区 天祖神社禰宜 |
| 大山 隆男 AB型 | 昭和三十九年十二月十六日生 |
| 千代田区 東京大神宮権禰宜 | 筒井 昌和 A型 |
| 昭和三十五年六月十八日生 | 豊島区 氷川神社禰宜 |
| 平賀 広一 B型 | 昭和三十五年十月二十一日生 |
| 千代田区 靖國神社宮掌 | 大島 資生 B型 |
| 昭和四十年十二月二十三日生 | 豊島区 大國神社禰宜 |
| 佐草 敏邦 A型 | 昭和三十八年一月五日生 |
| 中央区 波除稻荷神社権禰宜 | 田中正浩 A型 |
| 昭和四十年三月一日生 | 豊島区 長崎神社禰宜 |
| 藤井 知樹 A型 | 昭和四十一年一月八日生 |
| 台東区 浅草神社出仕 | 鳥海 普意 O型 |
| 昭和三十九年一月八日生 | 板橋区 稻荷神社権禰宜 |
| 田村 泰教 A型 | 昭和三十九年七月七日生 |
| 波谷区 明治神宮出仕 | 藤波 賢二 AB型 |
| 昭和四十年八月二十九日生 | 板橋区 氷川神社権禰宜 |
| 磯貝 智洋 O型 | 昭和四十年九月九日生 |
| 波谷区 明治神宮出仕 | |
| 昭和四十年九月二十七日生 | |
| 小山 快哉 O型 | |
- 以上の方々が入会されました。青年会活動に積極的に参加される様みんので呼びかけましょう。

昭和六十三年度事業計画

○教養部

- ・ 総会・新年会の講師依頼
- ・ 禊錬成講習会 七月十三、十四日
- ・ 教養講座 三回開催
- ・ 雅楽講習会 毎週金曜日

○教化部

- ・ 国旗掲揚推進運動
- ・ 神棚奉斎運動
- ・ 神宮式年遷宮の広報・啓蒙運動
- ・ 青少年教化育成事業
- ・ 都氏青協事業への参加協力
- ・ 諸団体への参加協力

○広報部

- ・ 「やくわえ」の発行
- ・ 神青四十周年記念誌の発行準備

○渉外部

- ・ 神青協及各県単位会との連絡並に資料・情報の交流を緊密にする
- ・ 各指定団体及友好団体との連携・協力を推進する

○事業部

- ・ ソフトボール大会 七月二十九日
- ・ 家族懇親納涼船 八月十七日
- ・ 健康診断 十月二十四日
- ・ 忘年旅行会 十一月下旬
- ・ 家族懇親会 二月～三月

皇居勤勞奉仕に参加して

本橋 宣彦

皇居勤勞奉仕は、『天皇陛下御在位六十年奉祝』の記念事業の一環として行つて以来、小野前会長のもと、東京都神道青年会の恒例事業となつた。

過去二回の御奉仕を通じて、作業のみでなく、一般に開放されていない皇居及び、赤坂御用地内をつぶさに拝見すると共に、皇太子殿下を始め、御皇室の方々の御会釈とお言葉を戴いた。又、第一回目



靖国神社にて大祓詞を奉唱

目

下よりお言葉を賜わり、奉仕団一同大変感激した。

係の方のお話では、陛下は御高齢であらせられるにも拘らず、多くの勤勞奉仕団に時間の許す限り御会釈を下さり、お言葉をお述べになると云う事であった。この心温かい陛下の御気性に接し、感動と共に私たちが御社頭に於て天皇陛下を中心とした日本を説く上で経験出来なかつた空白を埋める、実の有る体験であつた。

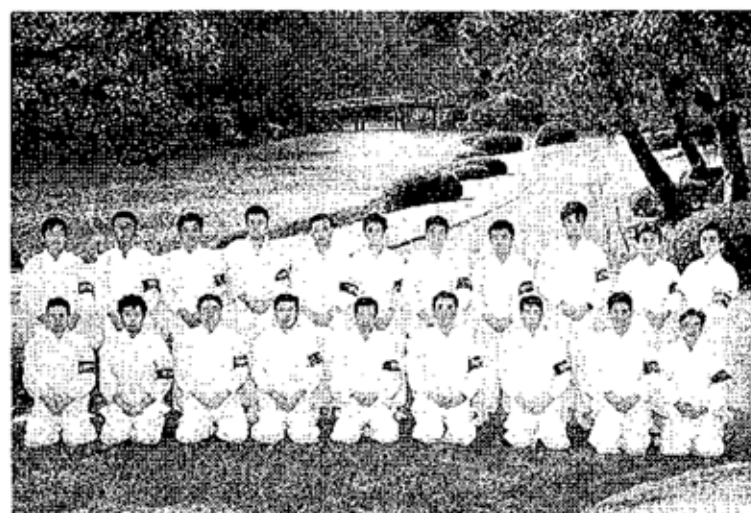
この大変大きな感動と体験を頂戴した勤勞奉仕は更に北川会長に引き継がれた今年度も第三回目を挙げて行くべく、担当の長谷川副会長を中心に実行委員会を組織した。宮内庁への申し込みが遅く、予定していた日程が組めず、やむなく多くの御社で月次祭を行う三月十五日より十八日迄の奉仕期間となつた。この日程内には大安、友引も含まれ、外祭など多忙を極める会員も多く大変参加調整の難しい結果となつた。しかし神青役員、会

員諸氏の努力と協力により、当初予定していた二十名の参加者を何とか確保し、実行の運びとなつた。

勤勞奉仕初日。曇り。桜の蕾も膨み始めた靖国神社の茶室、行雲亭に午前七時に集合、直ちに上下白の作業着に着替え神前に於て大祓詞を奉唱、参拝の後に、タクシ

ーに分乗して皇居桔梗門に向かった。(当会では、第一回御奉仕以来、靖国神社の御好意により、集合場所として使用させて戴き、英霊に参拝した後、奉仕に出発する方針を取っている。)

八時、皇居窓明館に到着、八時三十分、体列を整え奉仕場所に出発。途中、旧江戸城々郭の名残である富士見櫓、蓮池濠、道灌濠を眺めながら目的地である皇居庭園係の詰所に到着した。そこでは、皇居内の諸行事に飾られるのであろう松、梅、ビヤクシンといった数百の素晴らしい盆栽が置かれ、その多くが国の指定を受けた樹齢数百年の古木である事を伺つた。



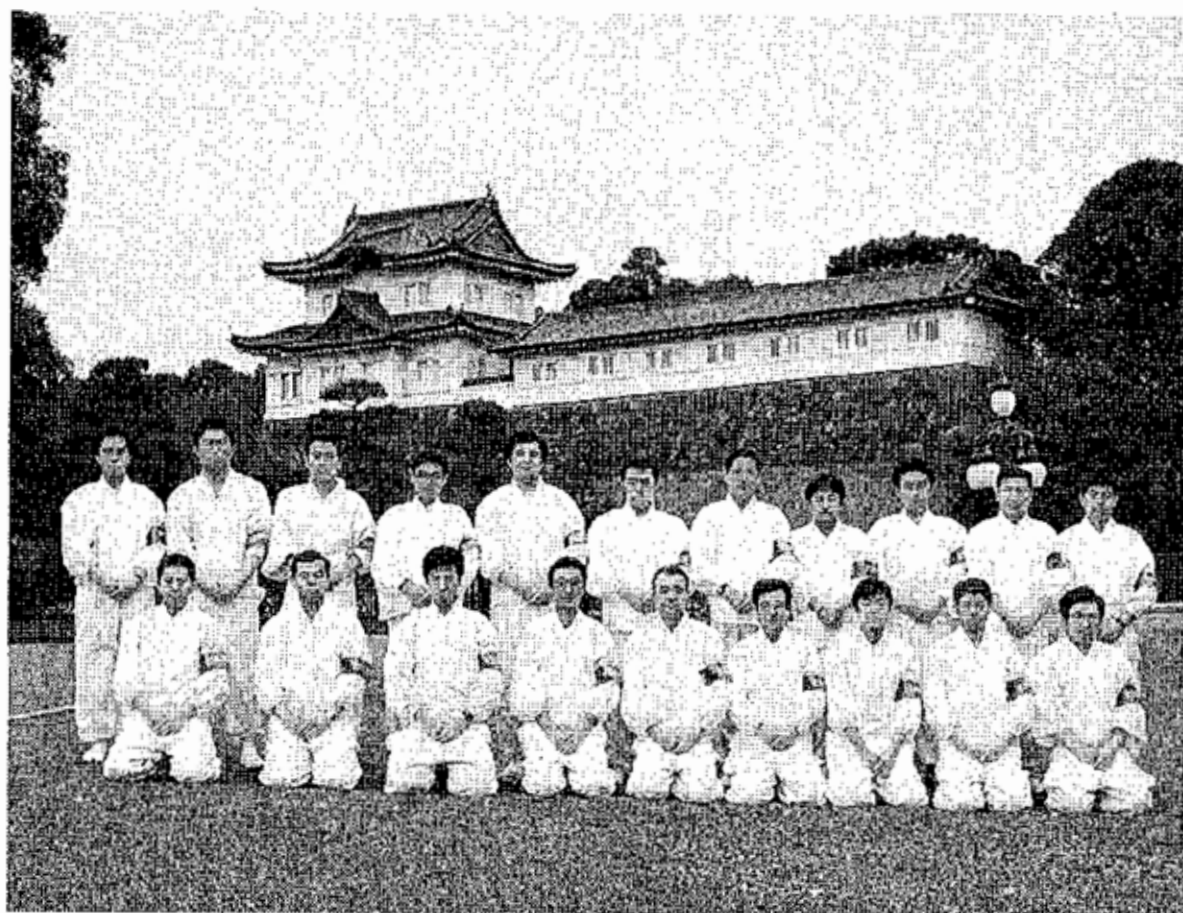
赤坂御用地にて

この日の作業は、午前、午後を通じて菊の用土とする堆肥作りを行った。

二日目。晴。奉仕場所が赤坂御用地の為、東京都神社庁に集合、庁舎内神殿で大祓詞を奉唱、徒歩にて御用地に参入する。

赤坂御用地は都会の中とは思われない丘陵地に展開され、その中

皇居にて



には馬場、テニスコート、又、三ツの池を巧みに組み入れた素晴らしい庭園が拡がり、その他にも梅林、竹林等、多くの木々に包まれ自然の豊富な正に皇室の方々のお住居

にふさわしい処である。私たちは赤坂庭園系の休憩所に集まり、作業に出発した。途中、宮様方が積雪の折にはスキーをなさると云う穏やかなスロープの芝の上

に腰掛け春の温かい陽射しの下で赤坂御用地についての説明を聞いた。簡単な清掃作業の後、東宮御所に赴き、皇太子殿下、同妃殿下、浩宮殿下に御会釈を給わり、万歳三唱を行った。三殿下御退場のごき、私ども団体に歩み寄られ、偶然前列に居合わせた靖国神社の職員に御声を

掛けられた。三殿下よりは「英霊の神霊をお守り下さい。」とねぎらいの言葉を戴き団員全員深い感銘を受けた。

午後からは庭園奥の大木が生い茂る斜面で青木、八つ手などの低木を取り除く作業を行い全員力を合せて黙々と作業に取り組んだ。

三日目。皇居奉仕。残念ながら雨の為作業中止、希望の団体のみ皇居内の見学に回り、江戸城本丸、松の廊下跡、天守閣跡、二の丸の庭園などを見学した。

四日目。皇居奉仕。昨日に続いて雨、作業は早々に中止となった。その日作業場として予定していた新宮殿内の庭園を見学した。庭園は三ヶ所に別れ、その一つには、池の対岸に直径三十メートルは有ろうかと云う二つの大きな植込みが有り、まるで一対の巨大な亀が寝そべっているような何とも雄大な景観であった。

今回の勤勞奉仕は天候に恵まれず四日間の御奉仕期間の内二日が雨で中止となり残念な結果となった。しかし一、二回目同様、参加者が多くの感動と思いを残してくれた事と思う。先述した様に私たち若手神職が陛下中心の日本を



全日程終了後反省会

説く時、得てして実感の伴わない建前になりがちだ。この御奉仕を通じてどれだけの事が出来たかは分らないが、しかし陛下の為に何かお役に立ちたいという気持ちは、誰しも同じだと思う。これを実践する事によって御皇室を身近に感じ御社頭に於て氏子の強化に役立てて頂きたい。

この御奉仕は、四日間の奉仕が原則で、日程的に大変困難と思われるが、独りでも多くの参加をお待ちしている。

最後に、昨年来の陛下の御病気が一日も早く全快し、御健康を回復される事を御祈念申し上げたい。

明年昭和六十四年で東京都神道青年会は創立四十周年を迎えることとなります。四十という数は非常に大きな節目の数であるといえます。御存知のように青年会の定年は四十歳であり、その意味からこの四十周年を期に東京都神道青年会は創立以来の活動にひとくぎりをうち、日常の活動は何ら変わることなく今後益々充実した発展の道をたどらねばならぬものの、会員一人一人はこれを期に新入会員になったつもりで組織・活動の出発点から現在までの記録を丹念に振り返りこの会の歩みを知り、反省すべき点は反省し、忘れられていた重要な活動があったならば会の活動に取り入れるべく努力し、全員がこれまでの四十年の歩みを確実に消化吸収した同じ基盤に立ち新たな第一歩を踏み出せることができるし、又必ずそうしなければならぬ大きな節目と言えます。それだけにこの時期に会員である一人一人は今後の東京都神道青年会の活動の鍵を握る重要な責務を負っている事を再確認していただきたいと思ひます。

この四月に発足した四十周年準備委員会は関連の広報・事業・教化の三部長の役員と年令的に過去の周年事業の中心的役割をはたされ今回の事業に御助言いただけた、現在の会の中心として御活動いただいております方、今後四十五周年・五十周年の時期にそれぞれ中心的に御活躍いただかなければならない方の四世代の委員から構成されております。今後準備委員会開催を重ね今年夏までに青年会の役員会委員会に具体案を提示致す所存であります。

現在考えられております案をあげますと、①「やくわえ」の創刊より現在の号までの合併号を刊行——前記致しました様本会の創立より現在までの歩みを全員が同一のレベルで消化することが出来る利点があり、四十周年の記念品とする考えです。

②神宮研修旅行——本会創立の折神宮に向き創立の報告の参拝を致しておりますがその後会としては参拝致しておりませんのでこの機会に賛助会員正会員打ち揃い参拝致しその後神宮の講師による選宮に関する講演と考へており、丁度昭和六十四年十一月は宇治橋の

四十周年に向けて

渡りぞめがありますのでこの時期が適当だと思われれます。この年定例の忘年会をなくし賛助会員正会員の多数の参加をお願い致し記念事業として会よりの補助を考へております。③時期——色々の考へが出ると思われれますが、昭和六十四年度が当青年会の任期切り替えの年であり又神道青年全国協議会も四十周年を迎え記念大会を例年通りなら六月に解散するであろう事も考慮し本会の周年事業はひとつの時期を区切ること無く昭和六十四年一年の

十四年一年の期間に随時消化出来る事業を消化してゆくことを考へております。④周年大会——この問題が非常に難問といえます。期間をかけ調整されねばなりません。全事業の予算枠を考へ又全国が会員均等に周年事業費を徴収する方向ともれきいておりますので、本会の周年事業は華美にならず会員に身になる事を第一義と考へる時、従来の場所での同規模の大会開催は準備委員会でも疑問視されておられる新しい形・場所での開催の方向で検討されております。しかしながらその原則

だけはこの紙上で明記させていただきます。それは参加費の範囲で賄うということですが、当然講演の講師等の問題も出てまいると思ひますが、やはりこの原則上で考へることに成ろうと思われれます。⑤今迄お読みいただいておりますが、この周年事業が全て我々の内向けの事業ばかりであるということですが、いま迄本会も全国もその周年事業の殆どが我々の世界を向いたもので有りました。外の世界に向けて事を行うことの難しさとそれが往々にして内部の自己満足に終わる事で、サポートと後の調査をしないためになおかつそれに気がつかずにおわる事です。限られた予算枠の中で執り行う事だけに充分に英知を出しあわねばなりません。小さい事でも有効な事をもうそろそろ考へるときではないでしょうか。

以上現在の四十周年事業への取組を述べてまいりましたが、前述致しました様そのほうこうづけの原則を崩す事無く充分に調整いたしてまいる所存です。会員の皆様のお力が一番の本事業の推進力です何卒御協力をお願い致します。

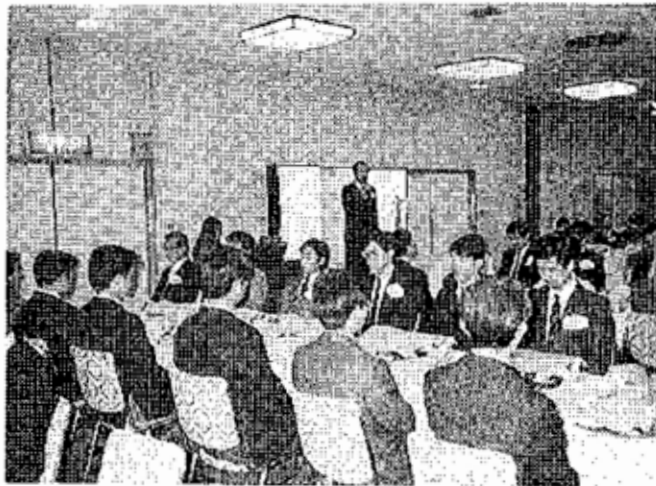
(準備委員長 鈴木昭樹)

新年会を盛大に開催

当会恒例の新年会が一月十三日神田神社の明神会館に於て開催され、来賓・先輩四十名を含む九十五名が参加した。

会に先立ち神社新報社専務取締役の葦津泰国先生による「神社界の今年の課題」と題した講演が行なわれた。

神田神社に正式参拝の後、第一部の式典が中田議長の下司会により進行し、長谷川副会長の開会の辞、神宮遙拝、国歌斉唱に続いて北川



北川会長の挨拶



葦津泰国先生の講演

会長、猿渡庁長、OB代表の今井先輩、関係団体代表の北山神青協会長がそれぞれ挨拶に立たれ、鈴木副会長の閉会の辞によって第一部を終了した。

第二部の懇親会では大石事業部長の進行により先ず神田神社の大鳥居宮司が乾杯の音頭をとり、歓談に移った。又、事業部による福引きも行なわれ、最後に全員で輪になり「美しき山河」を合唱して散会した。

神青協中央研修会開催

神道青年全国協議会（北山秀彦会長）の中央研修会が二月二十三日、二十四日の二日間に渡り岐阜グランドホテルで開催され、全国から会員四百名が参加した。

今回の研修会は「神と食文化」を主題に加瀬英明氏（外交評論家、茂木栄氏（國学院大学日本文化研究所講師）の講演や、各地区代表による意見発表、討論会が行なわれ、当会から参加した北川会長を始め十六名の会員たちは、あらためて今日の米の輸入自由化問題に関心を深めた。



神青協中央研修会

家族懇親スキーを開催

神青会の家族懇親スキーが三月二十八日、二十九日の二日間、新潟県湯沢の双葉ホテルにて開催された。（写真）



午前八時半、上野駅に集合した一行は、上越新幹線「あさひ」にて一路越後湯沢へ、スキーは当会初めての試みであったが、天候にも恵まれ、子供十名を含む二十六名の参加者達は露天風呂につきりソリ大会・トランプゲームに歓声をあげて懇親を深めた。

お知らせ

教養部

○教養講座

第一回教養講座は七月六日六時半より神社庁にて行なわれます。今回は『神莽祭について』と題し、平岩満雄先生(東京都神社庁顧問)をお願い致しました。皆様の参加をお待ちしております。

○靛錬成講習会

当会恒例の靛錬成講習会が、七月十二、十三日の二日間にわたり青梅市御嶽山に於て開催されますので、ふるってご参加下さい。

事業部

○第十回ソフトボール大会

今年で第十回を迎えるソフトボール大会が、七月二十九日(金)神宮外苑軟式野球場に於て盛大に開催されます。真夏の太陽の下で楽しく汗を流してみませんか。

○健康診断

今年で四回目を迎える健康診断を十月二十四日に予定しております。この機械に是非ご参加下さい。尚、前回受診された七十名の方の結果は、左記の通りです。

○家族懇親納涼船

納涼船による懇親会を八月十七日に開催する予定です。船上での楽しいゲームを計画しておりますので、御家族そろって出かけ下さい。

前号巻頭文謹訂

前号巻頭文中に誤りがありました。教育勅語渙発百周年は昭和六十五年です。謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

◇編集後記◇

去る四月二十二日に行なわれた神道青年全国協議会の総会に於て、当会の会報『やくわえ』が、優秀会報賞を受賞致しました。

これは偏に歴代の広報部員の方を初め諸先輩の方『やくわえ』に対する熱意と御協力によるものと深く感謝し、これを機に、より充実した『やくわえ』を発行すべく、広報部一同努力してまいる所存です。

これからも先輩諸兄の御指導と会員各位の御協力を切にお願い申し上げます。(阿部)

健康診断結果報告書

実施日 昭和62年10月13日

項目	検査内容	受診数	要観察	要精検	要受診
呼吸器系	胸部レントゲン	70		1	
循環器系	血圧測定	70	3		9
	心電図	70	1	1	
	生化学検査	70	15		4
腎尿路系	尿蛋白	70		1	
	生化学検査	70			
消化器系	胃部レントゲン	70		6	
肝機能	生化学検査	70	15		1
糖尿病	空腹時血糖	70		2	
	尿糖	70			
血液一般	赤血球・Hb・Ht	70	1		
	白血球	70		7	
脾機能	血清アミラーゼ	70			
	ウスビリノーゲン	70			
	超音波検査	63	5		2
	子宮がん検査	11			

・受診総数70名中、要精検者実数(率) 27名 (38.6%)

昭和六十三年六月三十日
 東京都神道青年会
 東京都港区元赤坂二―二―三
 東京都神社庁内
 電話 四〇四―六五二五(代)